

## 「沙石集」と「昨日は今日の物語」における

### 「笑い」の発想について

音 誠 一

はじめに

「沙石集」は中世説話集系列に属し大部分は堅い仏教説話であり中には平易で庶民的で一般大衆に理解されやすい説話が見られる。本書中殊に文学的興味のあるのは、種々の滑稽譚や性的の笑話が存在している点で後世の落語、笑話等の祖とも見らるべき滑稽な笑話が随所に出ていて、とあるように「沙石集」は仏教説話の中では笑話性が多いといわれている。また写実性も強く高座での放談などという点からみて、当時の説教として生に近いのではないだろうかと思われる。そういう面では「宇治拾遺物語」とは違った面がある。一方江戸笑話本の笑いとはかなり感じ方が違うように思われる。また説教の高座での放談とはいふもののお宗教性は強く、仏教教義を根底に踏まえ、その範囲を逸脱することがなかったのではないだろうか。こういった点から見ると、「沙石集」の仏教説話は人間性の機微に触れるという点に重点があるのでないだろうかと考えられる。聴衆を前にした説教の場で聴衆の中へ入りこみ共感を共にするには充分な効果があったらうと考えられるのである。

仏教説話はいかほどの数にのぼるがその中で「沙石集」は「宇治拾遺物語」などの笑いとは違う笑話性を多く含み、後の笑話本の祖といわれるが、本格的江戸期笑話とのつながりや相違点はどうなのであろうか。相違点があるとすればそれはどこからきているのであろうか。単に時代的差とはいえないのではないだろうか。このような問題意識をもって「沙石集」と初期笑話本の「昨日は今日の物語」との発想とを少し比べてみたい。「昨日は今日の物語」をとりあげたのは笑話集としては当時幾種類も出版され、よく読まれたといわれ、また内容も笑話として傑出したものが多く、平易で親しみやすく初期笑話本の代表の一つと考えられるからである。

ただ約三〇〇年という成立の時代的差は、其間をつなぐ適当な笑話性の濃い文献を求めることができないまま、今回は両者を比較するにとどまった。

「沙石集」は弘安二年（一二七九年）に起稿されその後しばらく放置されたのち弘安六年再び書き継がれて、同年の仲秋に脱稿された。「昨日は今日の物語」は成立年代不詳。大阪浪人の子の話など

から大阪浪人が社会的な問題とされ出した寛永初年頃の成立と見てよいのではないか。)

その笑いの比較検討であるが、その発想を分類することは容易ではなく、その焦点は定めがたい。しかし今、便宜的に、大きな問題点を次のように分けてみた。

- 1、言語遊戯
- 2、無知・うつけ
- 3、人情
- 4、性に関するもの

#### 1、言語遊戯

「沙石集」巻五末には歌、連歌などがまとまって見え、説話を構成している。中には言語遊戯の色彩の濃いものもみえる。

君ヲノミコイクラシツル手スサミニソトモノヲダニネゼリヲゾツム

この歌の返事に「和歌ハ皆、コトバゴトニアヒシラキテ、返事ハ申事ニ候」ということで

我シラミフナアカシカメアシモムチャウセドノハタケニ是キヤウヲゾヒネル(巻五末・四)

というふうに各語句を対応させ、語呂合せ、もじりとしたもので類話として「昨日は今日の物語」には

君をのみ戀ひこがれつる手すさみにかどでに出て根芹をぞ摘む我しらみ鯛あぶり鷹足もちりせどの畠で牛蒡ひきぬく

とある。これらは単なる語呂合せである。性的語句を掛詞として読みこんだ歌もあり、言語遊戯の面があらわれている。

御前ノマヘイカニモイタセ制スマジコナタノ四至モシドケナケ

レバ(巻五末・四)

マヘ(前・婦人の陰部) 四至(四方の境界・小児の陰莖)

「昨日は今日の物語」では

二字寺もいまは六字になりけり東妙寺より四字をいるれば

(下・43)

四字(字数四・小児陰莖)というような歌があり同様の傾向が見られる。

連歌も巻五末・七「連歌の事」として

船ノ中ニテ老ニケルカナ

ウキクサノカケヒノ水ニ流キテ

(前句船を水槽に老いるを生えるに見た)

ヤツアレバコソ蜂ト云フラメ

二十キバハタヲリニテゾアルベキニ

(八・二十、蜂・はた織り)

コヲコヲコヲトハラゾナリケル

河船ノアサセモチカクナルマムニ

(前句腹のなる音を付句で船の腹に見たてた)

というような遊戯の面の強いものが見られる。これは「昨日は今日の物語」でも同様で

さるちごとみるよりはやく木へのぼる

大のやうなる法師きたれば(上拾・74)

(前句さるは例の・猿をかけた)

望月の木がくれしたる今夜かな

たゝみのへりを山の端にして

(前句餅・望をかける)

連歌においてはよく似たものがとられ、それ程差はない。

その他文中の掛詞も見られる。量的には少ないけれど「昨日は今日の物語」に比べて同傾向といえる。「腹ハ湯ト共ニタチ」（腹が立つ・湯が沸き立つ）（『沙石集』巻四・六）「底ヲクミタリツル」（底・其処）（『沙石集』巻八・二）

正確には言語遊戯とはいえないかも知れないが「思み詞」に掛けた話がある。昨日は今日の物語」にも上・41ではもの思みする人が下人をよびよせ、あすは元日だからと若水をむかえるときのまじないの文句を教えこむが、元日になり忘れたので、腹を立て枕を投げつける。その時下人は「人の物思ふ所へなげきをさせらるゝ」といった。この下人のことばの中には「物思ふ」（愁いに沈むという不吉な意を含む）「なげき」「投木、木製の枕のほかに嘆きの意があり、不吉」といったことからせつかく物思みしているのにそれを知らないで下人が破るといった滑稽である。そのほか上拾33、下56も同発想である。「沙石集巻八・十九にも「便船シタル法師事」では下総の渡場に、ある法師が船に乗り船頭が思ひ船の思みことばを次々といひだし、あまりのことに、船頭が笑い出してしまふ。風早（かぜはや）地名・突風の意に通ず）唯蓮坊（ゆゑんぼう）（人名・湯入れん―湯は船中に浸み込む水）大豆をこぼれ（船がこぼれる意に通ず）、への方に行て、うちかへりて（船がひっくりかえる意に通ず）などの思み詞と語呂を合せ笑いを生じさせている。

## 2、無知、うつけ

「沙石集」巻八は笑いの最も一般的要素である「愚かさ」が主題となっている。無住法師は「此巻ニヲコガマシキ事ヲ集ム心、賢キ

道ニ入レトナリ」といつているように「賢キ道」に入る手段としたのである。

巻八・二では、酒を買って来たが飲んでみると水であった。そのわけを聞いてみると途中ですべてころんで酒入りの瓶子を猿沢の池の中へこぼしてしまつたが、すぐさま底をくんだという話や、巻八・七ある山法師が馬に乗り、出かけるが馬がどうしても橋を渡らず後ろへ退くので「此馬ハ尻カラ渡ムト思ヨ」として尻から橋を渡ろうとするが馬はどうしてもいうことをきかないという話などあり、その他巻八・（一・三・四・五・六）ほかかなりの数がみられる。また他の巻にも「杵（きね）ニテ臼（うす）ツグベキ様アリ。一ノ臼ハ、常ノ如ク置キ、一ノ臼ハソラニ、下ニ向テツルベシ。サテ、キネヲ、アゲ下ザマニ、二ノ臼ヲツク」といったような馬鹿げた話がある。これらの話は作為のないほんとうの無知というべきで「昨日は今日の物語」にも多く見られる。同書上・12では田舎の主人と下人が京へ上り、三条に宿をとり東山へ見物に行く。その時、宿の目印として下人は門柱にツバで書きつけをしておいたり、屋根に蒿のとまつているのを目印にしておいたりした話で後世落語のオチなどにも使われている。

こういった笑話は笑いの正統派とでもいうべきで、登場する主人公の行為、動作、会話などは愚かではあるが憎めず暖い感じである。中には全くピンとはずれの話もある。

また「沙石集」では主人公の行為、動作などはあまり馬鹿にはしていない。やはり「賢キ道ニ入レ」という説教が働いているのであろう。

「昨日は今日の物語」では本格的な笑話本である以上、やはり笑いのための笑いであって途中で手を抜かずとことんまで笑いつめてい

るという感じである。

### 3、人情

笑いの派生には単なる言語遊戯や語呂合せ、駄洒落の類でなく人情の機微をうかがった笑いといったものがあり、それらを考えてみると知恵話トシテ話の類、意外性や思惑違ひによるもの、欲深かケチの類などに分けることができる。

#### A、知恵話トシテ話の類

昔話・民話などよくいわれる和尚さんと小僧さんタイプのトンチ話系統のものがある。巻八・一〇「小法師利口の事」或山寺ニ僧アリケリ。慳貪ニシテ、キビシク、マサナクシテ、事ニ触テ小法師ヲバ疑ヒ、戒メケルニ、ヤイ米ヲ桶ニ入テ、ヒトリ食テ、ヨクシタムメテ封ヲ付テ置タリケルガ、事ノ外ニ減ジテスクナク見ヘケレバ、例ノ小法師ヲ呼テ、「何ニワ法師ハ、此ヤイ米ヲバ盗タルゾ」ト云バ、「サル事候ワズ」ト答フ。「慳ニ盗タルヲバ、何ニ論ズルゾ」ト云ヘバ、「何事ノ證據ヲ以、カクハ被レ仰候ゾ」ト申ニ、「ヲレガヘヲヒリタルガ、ヤイ米臭時ニ、ソレコソ證據ヨ」ト云ヘバ、小法師ガ云ク、「サレバ、ヘワ食タル物ノ香ノシ候カ」ト云ヘバ、「子細ナシ。サゾカシ」ト云。「サテハ、御坊ノ一日比、ヘヲヒリ給テ候ガ屎臭候シハ屎バシナリテ候ケルカ」トゾ云ケル。坊主ツマリテ、ヲトモセザリケリ。」という話で小法師（小僧）が無慈悲な僧（和尚）のことは尻をつかまえてギャフンといわせる話や同じく欲深かの僧が飴をつくってひとりで食べ「是ハ人ノ食ツレバ死ル物ゾ」といって小児には食べさせない。そこで小児一計を案じ、その毒の飴をタラフク食べ、その欲深かの僧を参らせる話（巻八・十一「児ノ飴クヒタル事」）などがあり、いわゆるトンチ話である。こ

の和尚小僧譚は「昨日は今日の物語」にはないようである。

「沙石集」巻七・一「無鉄妬ノ心人ノ事」の中に「遠江国ニ或人

ノ妻、サラレテ既ニ馬ニ乗テ打出ケルヲ、「人ノ妻ノサラルム時ハ、家中ノ物、心ニ任テ取ル習ナレバ、何物モ取給ヘ」ト、申ケル時、「殿ホドノ大事ノ人ヲ打捨テユク程ノ身ノ、何物カホシカルベキ」トテ。打咲テ、ニクイゲナク云ケル氣色、マメヤカニ「絲惜ク覺ヘテ、臆而留テ死ノ別ニ成ニケリ。人ニ惡レ思ハルムモ、先世ノ事ト云ナガラ、只心ガラニ可レ依。」殿御ほどの大事の人をうち捨てて何物が欲しいでしようか、というわけである。古今変らぬ人情、人間性といったものが表出している。「昨日は今日の物語」では同系統の類話として収録され、下22ではもっと具体化されている。特に金地院本では「われわれのほしきものは、これよとて、五六すんなる物を、ひんにきりとつて」、寛永版では「われわれのほしきものは、これよとて。おとこの物をひんにきり、ひたものひねりける」となり、性的な笑いを添加させ、より笑いのための笑いがみられる。またこじつけによる知恵話の類がある。ものの名前を知らないで当意即妙、弁舌さわやかにして、適当に名付ける滑稽な話がある。「沙石集」巻八・十六に、ある公郷のところへ物知りで何でも知らないものはないという男が就職を希望してきたので召しかかえる。その後公郷は播磨の国司として任地へ下った。ある時明石の浦で麒麟はどのもので目も口もなくぬるぬるとしてころがって廻る生物が網にかかった。誰も名前を知らず、この召しかかえた物知り男に聞くと「クダルグツと申します」といった。そこで日記に記録する。その後四年の任期が果てて都にもどり、例のものを出して名前を聞くがみな忘れてしまい、日記もなくなっているので物知り男に聞くが、適当につけた名前なので忘れてしまっている。見るとカラカラ

に乾いて干上っているので「ヒュリヒツと申します。」といった。ところが当時の日記が出てきたので、みると「クダルグツ」となっている。「これはいったいどうしたのじゃ」といったら、すかさずそれは生の時はクダルグツで乾いた後にはヒュリヒツと申します」といったので、それで終りになってしまった。という話で一種のトンチ話といえる。「昨日は今日の物語」でも上拾・3に信濃の国の田舎者が生鯛を尾張の熱田へ買いに行き、実物を知らずだまされて螺をつかまされて帰る。その螺に対していろいろな人物が勝手に名前をつけ、知ったかぶりをする「まどひき」「おにのきこぶし」「へふぐり」「にかわとき」などいいあう話がある。田舎者の無知が題材であるが、知らないものに名前をつけるという点では相通する。

#### B、意外性によるもの

思惑違い、意外性をもつもの、意表をつくものなどが笑いを派生させている。笑いの要素としては比較的単純でありおもしろい。

「昨日は今日の物語」では、若衆（ちご）の食気、物欲、下品さその他若衆にふさわしくない行動などはすべて笑いの題材としている。僧侶の肉食妻帯といったことを題材とし、そのしてはならぬという行為が露見することによって生ずる笑いをとりあげ、それこそ笑話のための笑話として徹底的に笑いに焦点を合わせている。特に戒律を破るという不自然さが笑いを誘ったものであろう。

その他「昨日は今日の物語」下・23では、亭主の留守に使用人が内儀に申したきことがござると開きなおられ、てっきり口説かれると思ひしかたなく返事をするが、実は「朝々の御飯が食いたらぬ。ちとおしつけて下されよ」という。色恋の方ではなくて食欲の方であったという話がある。上・61、下拾・10など同発想といえる。

「沙石集」にも巻八・十五「ヲコガマシキ俗事」には鬼九郎と

いう大男で顔に疵のある強そうな男が奉公したいと申し出る。実はこの男見かけによらず臆病者であったという話で意外性が強調されている。

#### C、欲深かケチの類

極端な欲深かさや吝嗇を描いたものがある。ある面では人間性に基ずくといえるであろう。

「昨日は今日の物語」下拾・15「有徳なる者にはかに病づき、五六日すぎてさん／＼弱り、目をまわす。親類共迷惑して医師を呼びて、まづ氣付を与へければ、病人、口に手をあて飲むまじきのを致しければ、みな／＼笑止や、何の不足があつて参らぬぞ。もつたひなや」と、こがれければ、女房つねの心を知つて「此薬は自らがおぢの御ふるまいにて候」といえば、そのとき口をひらぎける。」といった話で女房が夫の吝嗇をよく知つていて伯父が薬代を出してくれたのですよというとその重病人が口を開いて薬を飲むという話で、ケチもここまでくればたいしたものである。

「沙石集」では巻八・二三「齒取ラルム事」では「南都ニ齒取唐人アリキ。或ル在家人ノ慳貪ニシテ、利簡ヲサキトシ、事ニフレテ、商心ノミアリテ、徳モアリケルガ、蟲ノ食タル齒ヲトラセントテ、唐人ガ許ヘ行ヌ。齒取ニハ、錢ニ文ニ定メタルヲ、「一文ニテトリテタベ」ト云。小分ノ事ナレバ、只モ取ベケレドモ、心ザマノ惡サニ、「フット一文ニハトラジ」ト云。「サラバ三文ニテ、齒ニツトリテタベ」トテ、蟲モクワヌ、ヨニヨキ齒ヲトリソヘテ、二トラセテケリ。」ということとで健康な歯まで抜いてしまふ。こういった業欲さも笑いの対象となっている。

#### 4、性に関するもの

「沙石集」には性をからませた話は割と少なく非常に淡泊である。「昨日は今日の物語」では僧侶の肉食妻帯というようなものは重要な材料となっているが「沙石集」ではそういった意識は少ないようである。女犯にしても性的ないやらしさはなく人間として真にせまった感じである。巻四・五「婦人ノ臨終ノ障タル事」では山法師が女人と語らうて仲よく暮しているうちにこの僧が病気になる。妻がてあつく看病しているうちに臨終となる。西に向い念仏をとる。その時、妻は「我ヲステム、イヅクヘヲワスルゾ。アラカナシヤ」と首にいだきつき、とっくみあいになり、そのまゝ息が絶えてしまう。こういった話は色欲というようなものではなく、人間味があり、夫婦愛、しかも笑話とは紙一重ということができよう。これが笑話になれば厳しい戒律の課せられた僧が、同じ人間であり、欲望も人並みであったということで隠していたことが露見することによって笑いが生ずるといった類型となる。

そのほか二階の天井から自分の妻と間男の情事を見するという設定は「沙石集」にも「昨日は今日の物語」にもみられる。

#### 「沙石集」 巻七・一

「信乃国ニ、アル人ノ妻ノ許ニ、マメ男ノカヨフヨシ夫聞テ、天井ノ上ニテ伺ケルニ、例ノマメ男来テ、物語シ戯レケルヲ、天井ニテ見ルホドニ、アヤマチテ落ヌ。腰打損ジ絶入テケレバ、間男コレヲ抱テ看病シ、トカクアツカヒタスケテケリ。心ザマ互ニラダシカリケレバ、許テカヨヒケルトカヤ。」

#### 「昨日は今日の物語」 下・59

「其方、女房を人が盗むをしらぬか。さて／＼うつけぢや。よそへゆくいて、かくれ居て見付て、打殺せ」の「叩け」のと、色

々いひふくむる。「心得たる」とて、二階にかくれて待つ所へ、案のごとく間男きたり、さまざま／＼ちけいのあまりに、女申やう、「真実思えば、前をねぶる物ぢやが、そもじは我々をさほど思召さぬ」といふ。男の曰く、「一命をかけて此ごとく参るに、御疑ひなされ候。今なりともねぶらふ」とてひきむくるが、あまり臭さに鼻にてなずる。女房よくおぼえて、「いまのは鼻ぢや」と云。「いや舌ぢや」といふ。詮議まち／＼するを、此男、節穴からのぞき、よく見て、「どちの鼻真でもないが、いまのは鼻ぢや／＼」といふた。」

「昨日は今日の物語」の方はずいぶんひどくなり露骨化し、卑俗し笑いのための笑いとしている。

そのほか下がかった笑いの対象として、屁、大小便などが話のくすぐりとして出てくる。「沙石集」巻八・十では小便を水船（飲料水を入れる水槽）に入れたり、河水の中へ入れたり、また屁は食べべたものの香がするといったり、巻五・七では糞と仁王経（句う）を出したりしている。これは「昨日は今日の物語」でも多く、おなら（上・7、下・9）、屁（上拾・73）、小便（下・29）、尻（下・3）、はこ（糞・上拾・15）などが出てくる。中には掛詞として用いられている。

その他性に関する語として「沙石集」には少なく、四至（四方の境界・小児の陰莖、巻五末・四や陰囊（巻八・九）といった語句がみえる。一方「昨日は今日の物語」ではそういった語句は非常に多く、まら、へム、しじ、松茸、毛、つびなどがよく出ている。

そのほか同発想の類語と思えるものが「昨日は今日の物語」となると性的意味が加味されている。

「沙石集」巻八・十二ある山寺の僧のところへ見に出す。その僧大変喜んでその児に「プラチ御前」と名付ける。その理由は世間に

はないような名前というので「かぶら」の「ぶら」をとって「ブラ」、「くくたち」の「ち」をとって「チ」合せて「ブラチ御前」と名前をつけた。この発想は「昨日は今日の物語」にも見られ、若党を使いに出し、使い先で出された御馳走の内容を問われて、「蘇の御汁」をいすらく顔を赤らめる。そのわけは「わはわこさまのわらは殿様のら、びは上様<sup>うえさま</sup>へさしあひ申」（上拾・14）つまり「ら」は「まら」で陰茎の上略、「び」は「つび」で女陰の上略で性的な笑いが焦点となっている。

おわりに

「沙石集」における笑話性と江戸初期成立の「昨日は今日の物語」との笑話性はかなり感じが違うようである。以上述べてきたように1、言語遊戯の面では両者ともにみられ、質的な差はそれほどないようである。2、無知、うつけでは両者ともうつけ者を笑いの対象としている点では同じで、行為、動作、会話など愚かではあるが、暖い感じがしてユーモラスである。ただ「昨日は今日の物語」においては本格的笑話本である以上、途中で手をゆるめずとことんまで笑いを追求し笑いつめているという感じが強い。3、人情では人情の機微による笑いという点で「沙石集の方がまさっている感じで」ある。人間性という面が笑いよりも先へ出されている感じが強いように思われる。4、性に関するものでは「沙石集」では割と少なく、それほど露骨化、卑俗化しておらず、淡泊な感じである。「昨日は今日の物語」では性に関したものは非常に多く、卑俗化、猥雑化している。

「昨日は今日の物語」は明らかに笑話本であって、それこそ笑いのための話ということができよう。太くたくましい健康な大人の笑いといったものが表出している。戦いに明け暮れ殺伐とした戦国から、織豊期へかけて宗教臭を離れ、底抜けに明るい笑い話として成

立し大いに語られ好まれたのであろう。

上・28で「歴々夜ばなしの座敷にて」とあるように、人数が集まった会などで笑い話がよく語られたものであろう。そういう点で御座敷笑話という面はありながら後の徳川文化爛熟期の陰湿なくすぐりはまだ見られず、当時の権力者である武将、豪商相手の健康な笑い話を収録したという性格がみられる。

一方「沙石集」は著者無住法師が庶民の間で布教につとめ、説教の際聴衆を笑わそうとしたというような実的な面が強いのではないだろうか。高座で聴衆を前にして説教をするという制約が常に存在していたのではないだろうか。高座からの放談とはいえない範囲を出ることがなく、その笑いの性質内容についても宗教性を離れることなく、自ら限度があつてその笑話性も卑俗化、本格笑話化することがなかった。つまり、大変大胆な推論ではあるけれども社会的位置がそうさせたのではないだろうか。

今後は説話自体の系譜において可笑性がどのように流れていったのか。仏教説話文学内部の検討と狂言、落語、江戸期笑話類とのつながり方など考えてみたい。

この稿をなすにあたり深井一郎先生に多大の御教示を載せました。感謝いたします。

（テキストは日本古典文学大系本を使用しました。）

註1、日本文学史 中世 至文堂

註2、日本文学大辞典 新潮社

註3、日本古典文学大系 沙石集

註4、日本古典文学大系 江戸笑話集

（追記）原典のルビは適宜省略したところもある。

（石川県立金沢錦丘高校教諭）